

鎌田慧さんは現代の円空か？ 下北核半島の旅

永田 浩三

所村のバス停だった。以来、57年にわたって六ヶ所村をはじめとした下北「核」半島に深く関わることになった。

ここ3年あまり、PARC自由学校（アジア太平洋資料センター）で、ルポライター鎌田慧さんの作品をひたすら読み、受講生の方と学ぶことを続けている。鎌田さんは自身の肩書きとしてノンフィクション作家は使わない。名乗るのはルポライタージュを書き続ける人間としてのルポライター。とかく贅肉が付きがちの私などにとって、なんてかつこいいことか。作品を読むのは目で文字を追うだけではない。大きな声で、さすがだという箇所を大きな声で朗読するのだ。最初にみんなで読んだのは第一作の『隠された公害』。これは、長崎県対馬の樫根という集落で発生したイタイイタイ病の原因を追ったもの。この前書きで、鎌田さんはこう書いている。「取材者としての私は、無辜の民の代弁者として、彼らの話を聞いて加害者を撃とうとしていた……」

『隠された公害』が世に出たのは1970年。大阪では人類の進歩と調和を謳った万国博覧会が開催されていた。この時、鎌田さんは32歳。次なる取材地として降り立ったのが、青森県・下北半島の六ヶ

2025年9月、わたしたちPARC自由学校の仲間は、鎌田さんとともに下北の旅に向かった。現地を案内してくださったのは、核のゴミから未来を守る青森県民の会のメンバーで、核燃サイクル阻止1万人訴訟原告団の伊藤和子さん。初日、八戸を出発した貸し切りの大型バスは、小川原湖に沿って北へ向かう。車窓からは、ごぼうや長芋の畑が続く。もっと荒涼とした土地を想像していたが、白い雲がぼつかりと浮かぶ青空の下、緑いっぱいの耕作地が広がっていた。そんな風景を断ち切ったのが、大きく広がる原燃再処理工場の壁だった。

1968年、竹内俊吉・青森県知事は、六ヶ所村を中心に石油化学コンビナートや製鉄所を建設すると発表する。だが、世界最大といわれた開発計画は、二度のオイルショックによって頓挫し、実現しないまま、今度は原子力関連施設に舵が切られていっ

た。

太陽光発電のパネルが大地を覆い、風力発電の風車が回る。その向こうに国家による石油備蓄基地が広がって見える。さらに東側には稼働の目処が立たない核燃料サイクル基地の巨大な塔がそそり立っていた。まさにこの場所を見ただけで今の日本のエネルギー事情が俯瞰できるのだった。鎌田さんはつぶやいた。「製鉄所を誘致する前は、酪農基地の構想や、甜菜てんさいを作付けし砂糖の大生産地にする計画もありました。しかし、いずれもうまくいかなかった。そこで製鉄所や石油備蓄の話が持ち上がるわけですが、それと並行して1969年から、当時の通産省は原子力産業の拠点にすることを決めていた。でもそれは県知事たちの胸に収められ、県民には知らされなかった。六ヶ所の開発は、沖縄と同じで、弱いところに政府がつ



石油備蓄基地

け込んだということです……」

核燃サイクル基地に向かう国道338号線に沿って、かつて農業や酪農、漁業に従事していたひとたちが土地を手放し移住した新住区と呼ばれる瀟洒な住宅地があった。

夕方、原子力船むつの母港であった関根浜漁港に向かう。そこには立派な「むつ科学技術館」があった。原子力船の中の動力を生み出す原子炉をガラス越しに見ることができた。びっくりしたのは、港に出て、大きなクレーンを見つけたときのことだ。原子力船ははるか昔に廃船になったのに、クレーンは今また稼働を始めたという。聞けば、港には関西電力で生み出された使用済み核燃料が荷揚げされ、中間貯蔵施設に運び込まれるのだという。福井県の核のゴミが下北に運ばれ、中間貯蔵という名目で蓄えられる。こうしたことをどれほどの人が知っているのだろうか。

むつの母港だった関根浜港



2日目

は、本州の最北端、大間崎を訪ねた。海の向こうに北海道の函館山がはつきり見えた。大間崎から南下すると、建設中の大間原発があった。M

OX燃料を燃やす大間原発。その建設にたつたひとりで反対し、300坪の用地買収を拒否し続けた熊谷あさ子さんの「あさこはうす」は今も健在だった。

あさこはうすに向かうまでの道は、両側を金網のフェンスに取り囲まれており、まるで三里塚の鉄塔に向かう風景と見まがう。大型バスの運転手さんは細い道を怖がるそぶりを見せず行き止まりまで、われわれを運んでくれた。熊谷あさ子さんは、2006年にツツガムシに噛まれたことが原因で急逝。今は娘の小笠原厚子さんが闘いを引き継ぎ、あさこはうすを守っている。鎌田さんの顔を見た時、厚子さんは長年の

あさこはうすのゲストハウス



知己に再会したような表情を見せた。3年前、全国の支援者や大学生たちの手で、寝泊りができるゲストハウスが建てられた。青いペンキは青空に映え、ひととき美しく輝いて見えた。あさこはうすの電気は風車や太陽光で賄う。水はペットボトルを運び入れる。運動の資金は、近くの海でとれたとろろ昆布やわかめを支援者たちが購入することで支えられていた。この日も、おしゃれな袋に入った海産物があつという間に売り切れた。

3日目は、東通村に向う。そこには、紺色をしたまん丸い形の交流センター、ポストモダン風な村役場、おしゃれな小中学校、照明が完備した野球場、巨大な高齢者介護施設が結集し、名のある建築家たちの実験場のような。鎌田さんによれば、ニュータウンの住民は少なく、生徒たちは周辺からバスを使って学校に通っているのだそう。なんと不自然なことだろう。海岸に並行して、限りなくフェンスが続き、至るところに監視カメラが設置されている。なかにはどこまでも防風林が広がっている。人っ子一人見えない。ここには東北電力10基、東京電力10基。合計20基、出力2200万キロワットの東通原子力発電所群をつくる計画がある。しかし、出来上がっているのは、2005年に操業を開始した

東北電力の一基だけだ。それも今は稼働を停止している。808ヘクタールの広大な敷地はこの先何に使われるのだろうか。原発ではない施設がつくられるのだろうか、さっぱりわからない。わたしたちは、立ち入り禁止の看板があるフェンスの前で集合写真を撮った。

東通原発から南下し、六ヶ所村郷土記念館に入る。そこには縄文時代の竪穴式住居の暮らしが再現されていた。古代からひとびとは、漁撈や木の実やきのこの採集、農業によって暮らしてきた。



東通村のニュータウン

下北半島のまさかり部分から陸奥湾の野辺地に至るまで、そして十和田湖の東側の五戸と三戸一帯は、戊辰戦争に敗れ朝敵の汚名を着せられた会津藩のひとたちが流罪として移住を強いられ、入植した斗南藩があった。斗南のひとたちの多くは、飢えと病に倒れ、命を失った。そのなかで、もとこの地に暮らしていたひとたちと移住者たちは、幾度となく訪れる凶作に耐え、菌を食いしばって生きた。

20世紀半ば六ヶ所村はさらに新たな展開を見せる。満蒙開拓に応募し大陸に渡ったものの、敗戦とともに引き上げた人たちが新たに入植したのだ。人生を再開した。

鎌田さんの名著『六ヶ所村の記録 上下』（岩波現代文庫）には、こんな記述がある。

「植えた馬鈴薯は腐って花をだした。その花を採って小豆と一緒に煮て食べた。三年間は松の木の根っこ掘り、七、八年たつてようやく生活できるようになったら、出稼ぎがカネになるようになった。夏は北海道、冬は東京、大阪。出稼ぎが本業化してくると、みんな負かされてしまった。男たちは土地を売って出ていこうというようになった……」

そんななか、開発に異を唱えたり

ダーが現れる。寺下力三郎村長である。1973年、開発に反対する寺下と賛成する村議会議員との間でリコール合戦が勃発。住民投票が行なわれ賛成派の村議の解職請求は不成立。一方反対派の寺下の解職請求も不成立となった。反対派と賛成派の争いは村長選挙に持ち込まれ、寺下は推進派の古川伊勢松に敗れた。しかし、寺下はその後も、村の農業と核のごみ捨て場は共存できないとして、生涯を賭けて反対を貫いた。1993年、寺下は、環境・公害問題に取り組み社会的不正義をなくすために活動する人たちに贈られる田尻賞を受賞。1999年、86歳で世を去った。

旅の道中、鎌田さんは見せたいものがある



泉田稻荷神社

るといって、バスに止まるよう指示した。そこには、むつ小川原開発に反対した開拓農民たちの運動の拠点となった神社があった。泉田稻荷神社。杉の巨木の間を抜けるとつましい社殿があった。小さな板が社の四方に掲げられ、闘争の中心となったひとたち、支援したひとたちの名前が墨で記されていた。九州のサークル村の上野英信さんとともにルポルタージュの世界で大きな業績を残した松下竜一さんの名前があった。そしてもちろん鎌田慧さんの名前もあった。鎌田さんの取材の原点を見る思いがした。

今回の旅で、私の方が鎌田さんを案内し、見てもらいたかったものがあつた。下北半島にいくつも残る円空仏である。円空は17世紀半ばのひと。生涯に12万もの仏を彫つたといわれ、現在およそ5300体が確認されている。その中で下北の円空仏は、円空が北海道に渡る前に彫つた初期のもので見える人に初々しい印象を与える。大間崎のあさこはうすから南下した長福寺。ここには見事な十一面観音がガラスケースの中に鎮座していた。度重なる飢饉に見舞われたこの地では、死者の霊を弔う鎮魂の思いがひととき真切だったことだろう。十一面観音は、現世の願いを叶え、極楽浄土に赴

十一面観音と鎌田さん



くことを約束し、信心があろうがなからうが分け隔てなく生きとし生けるものすべてを尊重し救済する仏だ。

まるで木地師のように諸国を渡り歩き、木から生まれ出る恵みを彫り出した円空。この円空という不思議な僧侶の存在を明らかにしたのが、民俗学の祖と言われる旅のひと・菅江真澄だ。そして菅江の魂は、稀代のルポライター・鎌田慧さんの中にも引き継がれている。民衆とともに生き、民衆とともに涙を流す。わたしは、円空・菅江の魂のバトンが、鎌田さんに確かに受け継がれていると思う。十一面観音をバックに微笑む鎌田さんの写真を撮った。その表情はいつにも増して柔和で、慈愛深い仏さまのようだった。

(ながた・こうぞう／ジャーナリスト)

▼表紙絵の作者▲



伊澤 良雄
(いざわ・よしお)

1913(大正2)年4月1日、徳島県美馬郡江原町曾江名に生まれる。大阪・都島工業高等学校土木科卒業。のち、徳島県穴吹町役場に勤務し、絵を独学。34(昭和9)年1月、日中戦争悪化とともに入営。一時帰還して結婚するが、41(昭和16)年太平洋戦争開戦直前に再召集。43(昭和18)年6月2日、ニューギニアのニューブリテン島ココポ第百三兵站病院にて戦病死。享年30。